

令和 5 年 6 月 2 日現在

機関番号：17102  
研究種目：基盤研究(C)（一般）  
研究期間：2019～2022  
課題番号：19K01115  
研究課題名（和文）琉球列島における西欧沈没船遺跡の実態把握と水中遺跡公園化へ向けた基礎的研究  
  
研究課題名（英文）Researches on the Western shipwrecks in the Ryukyu Archipelago for clarification of the existing conditions and establishment of the underwater archaeological parks  
  
研究代表者  
片桐 千亜紀（KATAGIRI, CHIAKI）  
  
九州大学・比較社会文化研究院・共同研究者  
  
研究者番号：70804730  
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：これまで、琉球王国時代の宮古島における異国船の座礁・沈没事件については、断片的な遺跡情報や文献・伝承で語られるのみだった。しかし、本研究の核である水中考古学的調査によって、船の具体的な座礁・沈没海域を特定し、西欧船を証明する遺物やその具体的な積荷など、船の実態と遺跡の全体像を明らかにできた。また、英国文献の調査によって、これまで知られてこなかった事件前後の詳細な歴史記録も明らかとなった。

本研究をとおして、宮古島市教育委員会と共同研究関係を構築でき、協力者のダイビングショップや海人は水中文化遺産への理解を深めるきっかけとなるなど、海底遺跡公園設置へ向けた基盤を整えることができた。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はこれまで文献・伝承で語られてきた宮古島における異国船の座礁・沈没事件をテーマとした結果、近世・近代アジア史を考える上で歴史の教科書にも掲載されているほど重要な“苦力貿易”を担ったイギリス船の実態を、水中考古学的手法によって沈没船遺跡から明らかとしたことに学術的意義がある。

また、沈没船遺跡を保存・管理することを目的に水中遺跡公園の設置を目指して地元教育委員会及び実際にその海を利用するダイビングショップや海人と連携し、新たに掘り起こされた宮古島の歴史を一般に普及できたことに社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）： Previously, about the stranding and sinking of foreign ships on Miyako Island during the Ryukyu Kingdom period, fragmental archaeological information, historical documents and folklore had only been told. However, underwater archaeological research as the core of this project, succeeded in identifying the location of a shipwreck, as well as the actual condition of the ship and the whole picture of the archaeological site, through the artefacts proving the ship to be a Western vessel and its specific cargo. In addition, research of British documents for the first time revealed detailed historical records from before and after the incident.

Through this research, a joint research relationship with the Miyakojima City Board of Education has been established, and the divers and fishermen cooperated with our research were able to deepen their understanding of underwater cultural heritage, thus laying the good groundwork for the establishment of an underwater archaeological site park.

研究分野：海洋考古学

キーワード：水中考古学 西欧沈没船遺跡 イギリス船 座礁・沈没海域の特定 苦力貿易 ロンドンでの報道 方形花崗岩石材の再利用 水中遺跡公園

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近年、世界各国は海洋鉱物資源や水産資源、文化資源の開発・活用を重要な海洋戦略として位置づける傾向がある。文化資源方面では「海洋法に関する国際連合条約」(1994年発効)や「水中文化遺産保護条約」(2009年発効)を受けて、水中考古学の調査研究・保護活用が活発となっている。我が国日本でも水中考古学の調査研究・保護活用を推進する動きは活発となっている。大学等の研究機関が日本各地の海域で水中遺跡の調査を継続的に実施している事例は増えており、文化庁では水中遺跡調査検討委員会が設置されて、「日本における水中遺跡保護の在り方について」がまとめられるなど、今後、埋蔵文化財保護行政においても水中遺跡の調査研究・保護活用が活発化する事が予想される。

沖縄県では約10年の歳月をかけて水中遺跡の種類や位置、数を把握するための悉皆調査が継続的に実施された経験があり、約200ヶ所の水中遺跡やその参考地が集成されている。しかし、これはまだ研究の入り口であり、今後、特定の海域や特定の遺跡について重点的な調査研究を行うことによって、水中遺跡から見た我が国、そして地域の歴史と文化を明らかにする必要がある。そしてその先には水中遺跡の保護・活用が待っている。本研究はその重点的な研究への展開と位置付け、西欧沈没船遺跡をテーマとする。

沖縄には「ペリー町」、「オランダ墓」、「ドイツ村」、「シュレーダー通り」、「インディアン・オーク号の遊具」など欧米の名が付けられたものが至る所にあり、地域に親しまれている。これらが一体何に由来するものなのかに気づいたのは、水中文化遺産の調査研究を始めてからである。

近世期、当時、琉球王国だった沖縄の海域にはたびたび西欧列強の船がその姿を見せていた。その理由として、強引に貿易を求める船や漂着、座礁・沈没などの海難事故によるものがあげられ、頻りに王府や一般住民と接触を持っていた事が文献や伝承などからわかっている。陸上には過去に西欧沈没船から引き揚げられたと伝わる鉄錨や積み荷などが記念碑や墓に転用されて沖縄各地に所在することもわかってきた。そして、そのことを裏付けるように、沖縄で集成された約200ヶ所の水中遺跡の内、沈没船などの海難事故に関係する遺跡は約20ヶ所(約10%)で、その内、西欧船に関係するものは7ヶ所もあることが明らかとなった。前述した欧米の名が付けられたものは、琉球王国後半～明治前半に欧米との接触の結果名付けられたものである可能性が高い。詳しい経緯等については現代には正確に伝わっていないが、西欧沈没船を核として考古学的、歴史的、自然科学的な学際研究を行う事によって、失われた記憶を再び明らかとする事ができると考えられる。

また、研究によって明らかとなった地域の歴史と文化は水中遺跡の保護も考慮した活用によって新たな海洋資源として利用することも可能となる。沖縄県は亜熱帯でサンゴ礁が発達した美しい海を利用したマリンスポーツが盛んである。水中遺跡の調査研究によって、美しい自然を楽しむだけでなく、海の人類文化をも海で体験し学ぶ事ができるシステムを構築することもできよう。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は琉球列島で座礁・沈没した西欧沈没船の学際的調査研究を実施し、考古学、歴史学、地理学的な視点から水中遺跡の様々な可能性を抽出・評価することである。西欧沈没船遺跡という普段目にする事ができない遺跡の現状を考古学的調査によって記録し、その実態を把握する。同時に海洋地理的な視点からその遺跡がそこで座礁・沈没した理由を考察することを目指す。また、歴史的な視点から文献調査等を行い、その船の沈没前後の経歴等を明らかとする事によって遺跡の情報に膨らみを持たせる。

西欧沈没船は過去の人類遺産としてだけではなく、その結果引き起こされた西欧文明との接触の影響が現代に記念碑、道の名前、公園遊具の名前等、様々な形で受け継がれている。学術的研究によって西欧沈没船遺跡が過去と現在を繋ぐものである事を明らかにする。また、その調査過程で、対象とした水中遺跡付近の海をフィールドとするダイビングショップや海人に対し、共に調査を実施する事によって、遺跡の価値や重要性、新たな海洋資源(観光資源)としての可能性について教育を行い、地元で保護・活用を図る基盤を確立し、未来には水中遺跡公園の設置を目指す。その海を利用するダイビングショップ等が水中遺跡の存在と大切さ、観光資源としての価値に気づく事によって、彼らが海の自然を愛し守るように、水中遺跡もその海の一部として愛し守っていただけるようになるだろう。

### 3. 研究の方法

本研究は、以下の方法によって進めた。

#### (1) 計画立案

琉球列島でこれまでその位置が知られている西欧沈没船の概要を整理した。これまでどこまで明らかとなっているのか、今後、どのような研究展開が可能かについて、考古学、歴史学、海洋地理、工学からなる研究分担者、研究協力者と共に情報を共有しつつ議論をし、その議論によって重点的に調査研究を行う西欧沈没船遺跡を宮古島の吉野海岸沖海底遺跡（1853年に座礁・沈没したと記録が残る異国船）に決定する。また、今後の調査について宮古島市教育委員会と共同研究体制を構築し、共に調査・研究を進める。

#### (2) 海底調査

吉野海岸沖海底遺跡の現状を考古学的に記録するための海底調査を実施する。海底調査はその地域に密着したダイビングショップや海人を協力者とし、共に調査を進めることによって教育を行い、未来に水中遺跡公園の設置と地域での管理を目指した取り組みを行う。

#### (3) 陸上調査

過去に海底(吉野海岸沖海底遺跡)から引き揚げられた船の積荷の所在を明らかにする。

#### (4) 聞き取り調査

吉野海岸で座礁・沈没したと伝わる異国船に関する伝承等の聞き取り調査を実施する。

#### (5) 文献調査

近世期に宮古島で異国船が座礁・沈没した記録が残る文献調査を行う。

#### (6) 成果発表

以上の成果について、専門家向けには地域の研究会で発表を行い、一般向けには展示会や講演会、体験学習会を実施する。

### 4. 研究成果

これまで、琉球王国時代の宮古島における異国船の座礁・沈没事件については、断片的な遺跡情報や苦力貿易に関係する可能性があることなど、文献・伝承で語られるのみだった。しかし、本研究の核である水中考古学的調査によって、船の具体的な座礁・沈没海域を特定し、西欧船を証明する遺物やその具体的な積荷など、船の実態と遺跡の全体像を明らかにできた。また、英国文献の調査によって、これまで知られてこなかった事件前後の詳細な歴史像も復元することができた。

本研究をとおして、宮古島市教育委員会と共同研究関係を構築でき、協力者のダイビングショップや海人は水中文化遺産への理解を深めるきっかけとなるなど、海底遺跡公園設置へ向けた基盤を整えることができた。

#### (1) 水中遺跡の記録

潜水調査及び干潮時の陸上調査によって吉野海岸沖海底遺跡は西欧沈没船遺跡であることを裏付けることができた。海底には約150本の方形花崗岩石材と少量の陶磁器類、西欧船の特徴である青銅の外板、船釘類が確認された。それらの遺物1点1点の座標と全体的な範囲をGPSによって記録することができた。その結果、遺物は高密度に分布するある海域から、海岸に向かって扇型に広範囲に散乱することが明らかとなり、台風など強力な波の力によって広がっていくことが考えられた。また、その遺物が高密度に密集する海域こそが船の座礁・沈没地と推定された。また、花崗岩石材の規模と現状の写真を記録することができた。

#### (2) 陸上での分布状況

吉野海岸沖海底遺跡で確認される花崗岩石材が過去に海底から引き揚げられて陸上で様々なものに再利用されていることが明らかとなった。再利用先には琉球王国時代から続く邸宅の庭園や御嶽、御嶽の井戸など、現在では文化財となっている場所がほとんどであった。また、稀有な例では現在も民家の玄関への階段などに利用されているものもあった。

宮古島は隆起珊瑚礁からなる島であり良質な石材を産出しない。西欧船の座礁・沈没によって海底に散乱することになった数万トンもの花崗岩石材はまさに島への恵みとなったことだろう。

#### (3) 文献調査

琉球側の複数の文献によって、吉野海岸沖海底遺跡が1853年に多量の中国人労働者(苦力)を乗せて中国からアメリカに向かう予定のイギリス船であることが明らかとなった。また、英国側の複数の文献にも記載されていることを確認した。それによって、船の名前や形態、規模が明らかとなり、具体的な船の姿を知ることができた。さらに、船の出港地(香港)と目的地(サンフランシスコ)、そして船が座礁する直前の様子や、座礁後の様子、ロンドンでは衝撃的に新聞報道がなされていることなども明らかとなった。

#### (4) 聞取調査

過去の聞取調査記録によって、中国人労働者(苦力)達の多量の遺体が漂着していたことが確認された。その範囲は座礁・沈没地と推定された海域から北側の海岸に向かって広がっており、かなり遠くの海岸まで流されたものもいたようだ。また、漂着した中国人の遺体を埋めたとされる海岸もあり、かなり具体的に場所まで特定できそうである。

#### (5) 水中遺跡公園設置へ向けた取り組み

地域の文化財は地域で保護・管理し、活用することが望ましい。今回の調査では、教育委員会との共同研究に力を入れ、分担しつつ成果を出してきた。例えば、干潮時に歩いて調査できる海域での花崗岩石材の分布状況の把握や琉球側文献調査、過去の聞き取り調査記録などは宮古島市教育委員会の研究協力者が主体となったものである。また、潜水調査では地元ダイビングショップと共に各種作業をすることによって、ダイビングインストラクターも遺跡の状況を把握することができた。遺跡の価値や意義については、調査中の議論によって教育することもできた。

今後、研究成果をわかりやすくまとめれば、遺跡の価値は伝えやすくなるだろう。また、共に調査を実施したダイビングショップのインストラクターや海人はすでに遺跡のモニタリングなどができるようになってきている。基盤は整いつつある。陸上の遺跡ではすでに実践されているように、行政が全体的な管理とルール作りをしつつも、ダイビングインストラクターが水中遺跡のモニタリングと水中遺跡の価値を伝えるガイドができるようになれば、その水中遺跡がある海域はもう水中遺跡公園と呼べるのではと考える。

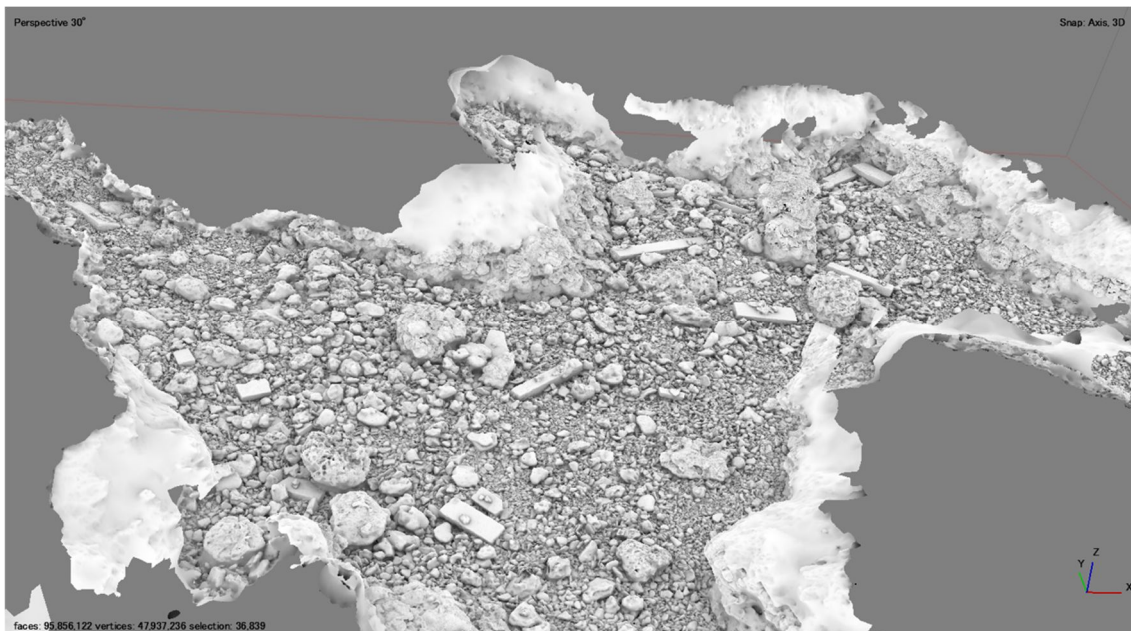


図1：船の積荷(方形花崗岩石材)が高密度で海底に散乱する状況のフォトグラメトリ  
大きいものは3mを超える。



図2：海底に散乱する方形花崗岩石材



図3：御嶽の井戸に利用された  
方形花崗岩石材

これらの石材は船の出港地だった香港周辺で産出する花崗岩の可能性が高く、これからアメリカで生活する中国人労働者の住居等の建築材とするため、船に積み込まれていたと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Chiaki Katagiri, Rintaro Ono, Yumiko Nakanishi, Hiroki Miyagi.	4. 巻 1
2. 論文標題 Research on the Wreck Sites, Sea Routes and the Ships in the Ryukyu Archipelago	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Shared Heritage: of the Sixth International Congress for Underwater Archaeology	6. 最初と最後の頁 19-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yumiko Nakanishi, Rintaro Ono, Chiaki Katagiri, Norimitsu Sakagami, Takashi Tetsu	4. 巻 1
2. 論文標題 Pursuing Sustainable Preservation and Valorisation of Underwater Cultural Heritage: Okinawa's Pilot Project for an Underwater Site Museum	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Shared Heritage: of the Sixth International Congress for Underwater Archaeology	6. 最初と最後の頁 292-300
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片桐千亜紀	4. 巻 No.237
2. 論文標題 西欧列強の沈没船遺跡と宮古島 HMSプロビデンス号の調査と研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宮古郷土史研究会会報	6. 最初と最後の頁 2-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 片桐千亜紀
2. 発表標題 西欧列強の沈没船遺跡と宮古島
3. 学会等名 宮古島郷土史研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 菅浩伸
2. 発表標題 最先端の浅海底地形図づくりとその活用
3. 学会等名 鹿児島大学 国際島嶼教育研究センター シンポジウム「新たな技術で喜界島の未来を考える」(招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 木村淳、小野林太郎、石村智、片桐千亜紀、菅浩伸、日下宗一郎、坂上憲光、佐々木蘭貞、鉄多加志、中川永、中西裕見子、林原利明、丸山真央、山船晃太郎、山本遊児、吉崎伸、Shinatria Adhiyatama、Julien Fortin、Sam Meacham	4. 発行年 2022年
2. 出版社 グラフィックス社	5. 総ページ数 240
3. 書名 図説 世界の水中遺跡	

1. 著者名 中西裕見子・片桐千亜紀	4. 発行年 2020年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 231
3. 書名 地中海の水中文化遺産	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	菅 浩伸  (KAN HIRONOBU)  (20294390)	九州大学・比較社会文化研究院・教授    (17102)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	坂上 憲光  (SAKAGAMI NORIMITSU)  (20373102)	東海大学・海洋学部・教授    (32644)	
研究分担者	小野 林太郎  (ONO RINTARO)  (40462204)	国立民族学博物館・人類文明誌研究部・准教授    (64401)	
研究分担者	渡辺 美季  (WATANABE MIKI)  (60548642)	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授    (12601)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中西 裕見子  (NAKANISHI YUMIKO)  (10845754)	九州大学・比較社会文化研究院・共同研究者    (17102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関